

# 農業ふれあい公園だより

2009 March  
No.16

【岩手県立農業ふれあい公園 農業科学博物館】 岩手県北上市飯豊 3-110 TEL 0197-68-3975



顔の輪郭部分の赤い稲で作った雑穀オニギリ



「純鬼くん」の顔をモチーフにした田んぼアート



花巻地区グランドゴルフ大会の様子



5月 ヤマブキ



7月 ナツツバキ



10月 マユミ

岩手県立農業ふれあい公園には 250 台もの車が収容できる駐車場が完備されています。園内の外周は最大 4.6 km、2 コースの散策路があり、道々には 46 種 3 万 5 千本もの樹木が植えられて、四季を通して色とりどりの花や実が目を楽しませてくれます。

天気の良い日は、ウォーキングやグループ・家族連れでのピクニック、4 面ある芝生のグランドではグランドゴルフ、ゲートボール等を楽しむ人々で賑わいます。

小高い桜の丘からは、ひょうたん池に注ぐ、せせらぎ水路や水車、棚田が見わたせます。

今年もミニ棚田では、農業研究センターの職員が田んぼをキャンパスに見立て、観賞用の稲を植えました。いわて純情米のマスコット「純鬼くん」や「ぶどう」「りんご」などの「棚田でお絵かき」は来園された皆さんを和ませてくれました。

## 平成20年度 企画展レポート

### 第36回 蚕の飼育・製糸用具と絹製品

平成20年3月5日～5月31日



養蚕の始まりは古代中国といわれ、東西交流の道「シルクロード」により、6世紀頃には織物と共に生産技術もトルコやギリシャを経由してヨーロッパにまで広まりました。日本へは朝鮮半島を経て、1世紀頃(弥生時代中期)に大陸からの帰化人が伝えとされ、中国の「魏志倭人伝」にも3世紀中頃にはすでに日本でも養蚕が行われていたと記されています。1620年(元和6年)に、伊達藩により現在の岩手県南地方に奨励され、1742年(寛保2年)には南部藩令によって奨励されました。

明治時代になると生糸は重要な輸出品目となり、国の奨励政策によって養蚕業は急速に成長し、1930年代には繭の生産が30万tを越えて世界第2位となりました。養蚕は我が国の近代化を促し、第2次大戦後は経済復興に大きく貢献しました。

近年、合成繊維の開発や外国産の安い生糸が輸入されるようになり、今では、国内の養蚕農家は大幅に減少しています。一方、蚕糸は衣料分野以外でも手術用の縫糸や釣糸などとして使われてきましたが、蚕糸の人体に馴染みあるタンパク質の性質を医薬品や機能性食品、バイオ化粧品などの新しい素材として利用する技術の開発が進んでいます。

また、日本原産で山野に生息する天蚕(ヤママユガ)の繭糸は優美な淡緑色を呈する高級な野生絹として珍重され、繊維のダイヤモンドとも呼ばれています。消費者ニーズの個性化、多様化のなかでその「本物の自然」と「希少価値」が注目されています。

この企画展では明治から昭和中期頃までの家蚕飼育や自家の生糸で使用していた用具類と衣料分野以外に広がる絹の用途を紹介しました。

### 第37回 穀物を食する

平成20年6月7日～8月30日

人類は遠い太古の時代から「食物の確保」のため、色々知恵を出し苦勞を重ねてきました。自然物の採取から栽培への取りくみ、地域外産物との交換へと進化しました。食物は調理や加工だけではなく、食器や食習慣、飲食作法など生活全般にまで繋がる食の文化として発達してきました。

人間の食生活は時代と共に変化してきました。長く続いた狩猟採取の時代は食文化の変化も緩やかでした。しかし、農耕の開始に伴い、食糧生産性が向上したことで食文化は変化の速度を増して、多様化していきました。

常食としての主食・副食・間食の食材の種類や混合内容は時代により変化が見られます。主食となる穀類は粒状での炊飯が基本となっています。これに対し間食としての利用は粉や餅に形を変え、更に手を加えて、団子・饅頭・焼餅・餅菓子・煎餅・麺類に仕上げ、1年を通して色々な場面で食されてきたようです。

晴れ食として、祝い事や祭り事など人寄せには、餅や団子は付き物です。また農村では農作業に伴う、季節ごとの儀礼が多く、その都度、作る楽しみ、食べる喜びとして代々传承されてきました。

労働食として、農作業の間食はオニギリが一般的だが粉や餅など、腹もちのよい物が好まれたようです。代用食・飢餓食は農作物が冷災害や病害虫により不作となり、食糧不足の場合には普段なら家畜や家禽の餌となるシイナや屑米・雑穀はもちろん山の実や草の根までも手を加え、工夫をこらして、食い繋いだと記録されています。



## 第38回 自給衣料と織物

平成20年9月4日～11月30日



たかはた  
高機による麻織



昭和の中期頃まで野山に自生している植物の繊維を取り出して紡ぎ、布を織って染色し、衣類や蚊帳・豆腐袋などの生活用具を自給していました。

今、主に衣料で使われている、木綿は肌にやさしい着心地よい布ですが、岩手では寒さのために栽培できず、むかしは、市日などで古木綿を手に入れ、自給の衣料に混ぜたりしながら、作業がしやすいように工夫されてきました。

雫石や玉山地域には、それらの工夫が発展し定着した独自の特徴ある作業衣が見られます。現在は、生活の近代化に伴い、衣服や生活用具は、好みや用途に合わせて、豊富な物資の中から買って購入できる便利な時代になってきました。企画展では、自給の時代に使われた、衣料繊維を作り出すための機具と衣料等を展示しながら、用いられた植物や天然染料などを紹介しました。

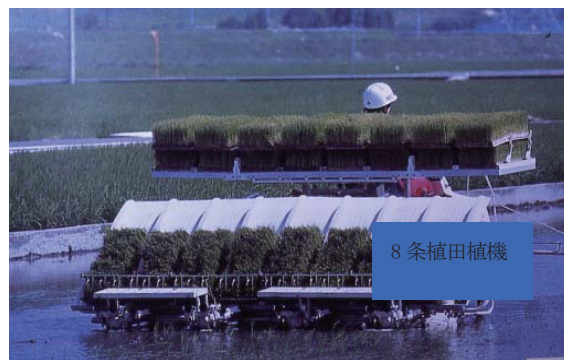
## 第39回 岩手の稲作技術と農機具の変遷

～全国最下位水準から上位躍進への軌跡～

平成20年12月7日～21年3月27日

岩手の近代農業の幕開けは県農事試験場が設置された明治34年頃からと言えます。当時は稲作を主体とする主要作物の生産技術開発は一貫として「安定多収」であり、そのため重要課題への取り組みが続けられてきました。◇耐冷性品種の育成、適正品種の配置・選択：稲の安定多収を図るうえで品種は大きく影響をします。殊に寒冷な本県では稲の登熟障害、生育遅延の回避が決め手でした。◇施肥技術の改善・土地改良：作物の単位収量や生産量は施肥量との関係が深く、自給肥料に頼った明治から昭和初期の物不足時代の収量は低く、その後、化学肥が潤沢にしかも安く供給された頃から生産は大きく伸びました。◇病害虫防除・除草体系の確立：肥料事情が良くなり、生産量の急増に伴い過繁茂や病害虫の被害が問題となり地域防除への取り組みが進みました。一方、長年続いてきた手取り除草は除草剤の出現により、10a当たり40～50時間から約5分の1の8時間に激減し、夏場の重労働から解放されました。

◇農作業の機械化推進：機械による作業能率の向上は著しく、稲作り作業は長い間、人の力と鍬や鎌など限られた農具を使い、物は背負って運ぶのが当然の時代が長く続いてきました。その後、牛馬などの畜力利用の時代を経て、全自動の大型機械の出現までの推移は非常に早く、安定稲作への生産技術は完成の域に達しています。



## \*\*\* 博物館・公園トピックス \*\*\*

### せんぼごき 千歯扱も貸出しています！

ビデオ・書籍の貸出し同様に千歯扱などの農具もお貸ししています。大型の運搬の難しいものは実習内容などにより応相談となります。



写真提供 北上市立和賀東小学校

### とうみ 唐箕を使っての選別作業を体験！

夏期限定！お天気のいい日は唐箕を使って雑穀など選別をして、ちょっとだけ昔の農業を体験できます。



### 社会科見学&感想文ありがとう！

北上市内の小学校をはじめ、遠くは大船渡東高等学校のみなさん、小・中・高校・養護学校等あわせて総勢1,258人の児童・生徒さんが見学に来館してくれました。わざわざ礼状・感想文を届けてくださった先生方ありがとうございました。



一関市立花泉中学校



北上市立南小学校

### 田んぼの土を利用して作った盆景

北上市在住の及川岳氏が製作した作品です。参観デー（秋の無料開放）2日間だけの特別展示です



奇岩紅葉

### \*\*\*第40回 企画展のお知らせ\*\*\*

現代の物資運搬はトラックなどを使った動力輸送が中心ですが、昭和の中頃までは道路事情も悪く、人力や畜力・自然力などを使っての運搬が大半でした。21年・春からの企画展は「運ぶ」がテーマです。

収蔵品を主体に物を運搬するために用いられた道具類を展示ご紹介いたします。

